

# 翻訳者の全技術

山形浩生

びっくりするほど

よくわかる

山形翻訳の秘訣が

(+訳者解説)

すつきりくつきり

よくわかる。

意外と正論です

大森望  
(「三体」翻訳者)

確信した。

もっと山形浩生は

報われていい

読書猿  
(「独学大全」著者)

識者が絶賛する異才・山形浩生が翻訳の裏側を語り尽くす!



翻訳者の全技術

山形浩生

星海社

326



SEIKAISHA  
SHINSHO



## はじめに

ぼくはどこに自分の商品価値があるのかイマイチよくわかっていないので、この本にどういう需要があるのかも、自分ではよくわからない面がある。山形浩生の翻訳のやり方ねえ。ぼくはそんな変わったことをしているつもりはないのだ。それに自分はいろいろな意味で、あまり普通の翻訳者ではないし、したがってそれを知ったところでほとんどの人は参考にもならないだろうと思う。そもそも、それに興味を持つ人が誰なのかもわからない。

翻訳に限らず、ネタの集め方や本の読み方その他についても同様だ。あれこれやりすぎているし、ここぞという分野があるわけでもない。ナントカ先生の知的生産の技法を知れば、ワタクシもいつかこの道の泰斗たいとに、とか、これをやればナントカ道の真髄に迫れる、といった話とはわけがちがうんじゃないだろうか。誰かがツイッター（現X）で、山形は帯の宣伝文句とかを書いたところで、書店でも扱いに困るというようなことを書いていた。

そうだろうねえ。

そんなわけで、この本の依頼があったときは、いささか面食らった。というか、これまでも勉強法とか翻訳術といった本の話はなかったわけじゃないが、何を書けばいいのかよくわからず、どれも立ち消えになっていたのだ。というのもぼくは自分では、目先でおもしろそうなものにホイホイ手を出しているだけなので、それ以上書くことがあまり思いつかないのだ。思いついても、ちょっと書いてみて「いやこんなつまらないことを書いてもねえ」と思っただけになってしまう。

それを言ったところ、それなら聞き役／まとめ役をつけてくれて、それをまとめようのご提案。なるほど、それなら他の人がおもしろいと思う部分が引き出してもらえるかもしれない。が、これまたいいのかどうか。山形は会議などで落とし所が見えていれば、かなり絞った話ができる（絞りすぎるくらいがあつて、結論を急ぎすぎでかえって失敗することも多いが）。しかし普通に話していると、とりとめがなくなるからなあ。だが、それがおもしろい、という面もあるのかもしれないし、それで悩むのはインタビュアーさんのほうなのでそこはお手並み拝見だ。

そんなわけで、2、3時間にわたる放談会を4回くらい行って、まとめていただいたものに手持ちの行き場のない原稿もいろいろぶちこんでできあがったのが、本書となる。

自分のことがわからないのは、もちろんぼくに限った話ではないのだろう。ファイマン自伝で、何かのイベントでモデルたちといっしょになったら、絶世の美女たちがみんな、自分は醜いと思いついで悩んでいて啞然とした話があったわけ。ファイマンはそこにつけこんでナンパに精を出したんだっけ？ ちがったかな？ が、それはさておき、たぶん本書で山形が「おお、ぼくは実は絶世の美女だったでございますか！」と悟ることはないだろうと思う。うちにだつて鏡くらいはあるのだ。が、何かしらチマチマした小ネタで、読者のみなさんにちよつとおもしろがついていただけのようなものは、あちこちにあるんじゃないかと思う。

自分はおもしろそうなものにホイホイ手を出しているだけ、とさつき書いた。その一方で、自分の好奇心がまったく一般性のないところに発揮されているとは思わない。というより、変なストーリーカーじみた犯罪スヌーピングでもない限り、誰のものでもないがいの好奇心は、ある程度まで掘り下げれば、必ず一般性を持つものだとは思ふ。ぼくは自慢だけ

れど、多少は頭がいい。だが、決して天才ではない。何かに興味を持つときも、とんでもない飛躍はしない／できない。その一方で、ぼくがわからない、不思議だと思ったら、おそらくほとんどの人は（どんなに知ったかぶりをしようが）やっぱりわからないはずだし、指摘すればそれを不思議だと思うはずだという確信もある。そしてそこで、意外なものがつながることだってあるだろう。

だから、本書の何やら散漫な話の中に、少しでもみなさんの興味をひくものがあれば幸い。そして「ああ、こんな雑でいい加減で行き当たりばったりでもいいのか」と思つて、自分でも適当に何か——たこあげでも料理でも電子工作でもプログラミングでも、そして翻訳でも執筆でも——始めてくれる人がいれば幸甚こうじんではある。

あと、ぼくは、この本でも何度となく繰り返すように、ジェネラリストだ。世紀の変わり目あたり、もう何でも屋はいらない、ジェネラリストは不要、一つの分野を深くきわめたスペシャリストこそが世界を支配するのだ、という議論がはやった。会社などでも、いろんな要素を持つ大企業の時代は終わった、何か一つの商品やサービスをきわめた専門企業こそが栄えるのだ、そして株式市場がそうした企業の評価と資金提供をコントロールするのだ、というわけ。



が、その後次第にそうした風潮も変わってきた。株式市場はしょっちゅうまちがえる。スペシャリストを評価するには、いろんな部門に目を向けたジェネラリストが必須だ。さらに各種のいろんな深い専門分野をつなぐ部分や、それを支えるインフラは、專業スペシャリストの寄せ集めではなかなかこなしきれない。ジェネラリストや、それに相当する機能というのは、スペシャリストがいても、いやスペシャリストが増えれば増えるほど重要性が高まるはずではあるのだ。

だからといって、残念ながららぼくの時代が到来したというわけではない。が、スペシャリストが一芸をきわめたような話はいろいろ珍重されてあちこちに出回っているけれど、ジェネラリストがいろんなことを雑にやり散らかしました、という話にはあまりお目にかかれない。子供の本棚にある日本の偉人伝でそんなのに該当する人物というところ……平賀源内くらいか。そんな腰の据<sup>す</sup>わらないやり方でも、やりようはあるのだというのを見て安心してくれる人もいるかもしれない。一方で、やっぱりそんなんじゃないヤツにはなれてないじゃないか、とがっかりされるかもしれないのだけれど……(スミマセン)。

……というようなことを含め、放談会では話したつもりだけれど、どんなふうにとまっていますやら。では、お楽しみあれ。

## 目次

はじめに 3

## 第1章 翻訳の技術 13

なぜ翻訳をするのか 14

出発点 17

翻訳の技術 26

原文通りに訳すということ 34

訳者解説の書き方 38

翻訳の基礎体力 44

英語について 52

翻訳の道具 59

記憶に残る翻訳家 61

翻訳者になるまで 69

## 第2章

### 読書と発想の技術 79

読書は大雑把でもいい加減でもいい 80

読書の意義 84

本の読み方 88

積ん読について 92

本の敷居の高さと期待効用 97

読まない本の危険性…積ん読の有毒性について 101

積ん読の時代変化 104

積ん読の解消 106

余談・山野浩一のことなど 111

行きがけの駄賃で・橋本治について 118

積ん読の先へ 122

勉強は小間切れでやる 128

わかったつもりが一番よくない 134

1週間なら誰でも世界一になれる 138

アマチュアの強みと弱み 142

好奇心の広げ方 145

オカルト雑誌とフェイクニュース 149

コンサルタントについて思うこと 152

### 第3章

## 好奇心を広げる技術 157

知らない世界を旅する 158

旅行をするなら 163

開発援助の現場に行くこと 167

社会主義国キューバの衝撃 170

モンゴルのノマドは自由ではない 179

変なものが好きだった 186

あとがき 196



第1章  
翻訳の技術

## なぜ翻訳をするのか

ぼくはこれまで百冊以上の本を翻訳してきた。その意味では、翻訳者ですと胸を張って言える。とはいえ、時間的にも収入的にも翻訳は副業であってメインではない。翻訳印税は水物ではあるため、ときには年収の中で翻訳印税の占める割合が最大になったときもある（ピケティが異常に売れたときとか）。が、それはあくまで事故だ。

さらに、普通の翻訳者はあくまで仕事としてやっているの、出版社から依頼があつて初めて翻訳をする（んだと思う）。が、ぼくはそういう普通のルートは、いまだに三分の二くらいかな。かつては、もっと少なかった。残りは、別に依頼があつて仕事としてやっているわけではない。単に自分がおもしろいからやってしまったというだけだ。

なぜそんなことをするのか？

その文章の自身に興味があることもある。あるいは、他の人がやった翻訳を見て、「これはちがうんじゃないかなあ」と思って始めたものもある。『クルーグマン教授の経済入門』は、前者だ（あとで既訳があるのを知ったけれど）。最近、ぼくのプログやウェブページに出ている、インターネットの開祖リックライダーの各種文章も、自身に興味があったからやっている。ケインズ『雇用、利子、お金の一般理論』や、ラヴジョイ『存在の大いなる連



鎖』、ポランニー『ダホメ王国の奴隷取引（邦題：経済と文明）』の場合は、その両方だ。

そうやって勝手にやったものが、商業的に出版されることもある。まだインターネットなどという便利なものがない頃には、できあがったものをおもしろがりそうな同僚や知り合いに見せて喜ぶと同時に、興味を持ちそうな出版社／編集者に企画書つきで送りつけた。『クルーグマン教授の経済入門』は、そうやって出版されたものだ。さらにいまだと、ネットにあげておくと（訳すのはOKだが、公開は半分くらいは著作権無視でホントはだめ）、それに注目して「出しませんか」と言ってもらえることもある。ケインズはそうだった。

が、そうならないもののほうが多い。特にすでにある日本語訳があまりにダメだと思っ  
て勝手に訳し直したやつは、その「すでにある日本語訳」が商業出版で流通しているわけだ。出版社もいろんな経緯があつて、その（山形から見ればダメな）翻訳を出したわけだ。それをあっさり引っ込めて、「はい新訳で出しました」とは言えない。正規の出版契約もあるし、元の訳者（あるいはその遺族）への義理もあるだろう。それをそのまま出してしまった自分たちの面子もあるだろう。映画化とか、文庫化とか、何か機会をとらえて「新訳です」ということはある。が、そんなことでもなければ、通常は放置され、ずっとネット上に転がっているだけだ。

だが、それはそれでかまわない。お金になれば嬉しいけれど、往々にしてぼくはそのために翻訳をするわけではないからだ。むしろ、興味を持った文章やテーマを自分が理解するために翻訳するのがメインだとすら言える。既存の翻訳を見て、何を言っているのかわからないことがままある。そこで原文を見てみると「なーんだ、ちがうじゃないか、こういう意味だよ、きちんと伝えようぜ」と思ってそれを書いているうちに、相当部分ができてしまう。だからその翻訳は、ぼくの理解のプロセスであり、その結果なのだ。

ある意味で、ぼくにとって、その時点で翻訳の元は取れている。その翻訳を（半分は著作権無視で）公開するのは、捨てるのももつたないからその理解をおすそ分けしましよ、う、というだけの話だ。他の人が、それを活用してくれるなら、とても嬉しい。たぶん他にも「なーんだ、そういうことだったのか」と思ってくれる人はいると思う。アマゾンのレビューで「意味不明の翻訳」と難色をつけていた人々が、ぼくの翻訳を見て、原文を英語話者が読んだときと同じような明晰な理解に到達してくれることもあるだろう。そうなれば、原作者も嬉しいはずだ。が、そういうのは基本はオマケでしかないとすら言える。

## 出発点

さて、ぼくの理解を伝えると言ったけれど、個人的には、ぼくは自分の理解、つまりは翻訳に何か特別なものがあるとは思っていない。みんな、日本語の本を読んで、それを理解する。英語の本を読むときだって、英語圏の読者はそうやって理解している。それを再現するだけだ。

だが、一部の翻訳を見ていると、そういう普通に本を読むレベルの理解が欠落している。としか思えないものがある。辞書を引いて単語ごとに訳語を並べ、その言葉をうまく配列して日本語の文章らしきものにしてしようとしているんじゃないかと思う訳文がある。いや、ツイッターなんかを見ているとマジにそれをやっている人と公言する人までいる。「あらゆる単語を辞書で引いて意味を調べないと翻訳はできない、うっかり知らない単語の意味が出てきかねない」とかなんとか。ふーん、あなたは、日本語を読むときにあらゆる単語を辞書で調べるの？ しないだろう。普通の文脈で読んでいて、わかんなかったときにだけ辞書を引く——本を読むって、おおむねそういうものだ。全部の単語を引いて、それで何か意味をでっちあげようというのは、大学一年生の第二外国語で、最初の頃の独文読解でやっていた。全部自分で引くのは面倒だったので、クラスで手分けしてやったりした。単

語を全部引くなんて、その水準の初学者だけだ。そしてそういうレベルの人には、そもそも翻訳させちゃいけないと思う。そんなクロスワードパズルみたいなことをしては、まともな翻訳になるわけがない。

そもそも、ぼくが翻訳家として活動するようになったきっかけも、世間で流通していたウィリアム・バロウズというアメリカ作家の翻訳がどうもおかしいという問題意識からだった。彼は20世紀半ばに、そこそこいい家を出てハーバード大学に行きつつ、ありとあらゆるドラッグをやって、同性愛者を公言し、奥さんを射殺して、その後前衛的な小説を書きまくって名をあげた人物だ。いくつか翻訳も出たが、わけがわからない。が、それはやっぱクスリやってるやつはちがうぜ、ということ、それをまともに見直そうという人も出なかった。そして当人もしばらく話題にもならなかったのだけれど……。

1980年代、浅田彰の『構造と力』や中沢新一の『チベットのモーツァルト』でポストモダン思想が紹介されていた。同時期にバロウズも、突然のように執筆再開。そしてポストモダン的な流行の中で、バロウズも強度と速度の新しいエクリチュールうんぬんという触れ込みで再び注目され始め、ナイキのCMに出たりしてファッショナブルな存在となってきた。

その流れで、『FOOL'S MATE』というロック雑誌に彼のインタビュー翻訳が掲載された。が、それもまったく意味不明。ぼくもふくめみんな、ジジイがぶっ飛んだ妄想語ってるぜ、ジャンキーあがりはスゲえなと思っていた。だがその後、ふと原文を手に入れて読んでみたところ……。

単なるジジイが聞きかじりのヨタ話を並べた、縁側放談えんがわでしかない代物だった。彼は普通にしゃべっていた。ぶっ飛んだ妄想だと思っただけのもの、完全な翻訳のでっちあげだった。

ヨタ話をありがたがるどころか、自分でヨタを捏造ねつぞうしてまつりあげて崇拜してみてもしょうがないだろう。そのときは「ダメだねー、こいつら」と内輪で言うだけだったんだが、その後いくつかその手の代物を見かけ、ちょうど柳下毅一郎（だったかな）が発見した、神保町の古本屋に出ていたパロウズ資料の大量在庫（時期的に、当時他界して間もなかった鮎川信夫の蔵書だったんじゃないかと思う）から仕入れた昔の資料やインタビューをもとに、ウイリアム・パロウズの各種おもしろさ（と既存の紹介のまぢがい）をまとめた『パロウズ本』というファンジン（ファンマガジン、同人誌）を作った。当時は渋谷のCD屋さんとか、池袋西武のリブロとかが、そういう同人誌の持ち込み販売もやってくれたのだ。それがそこそこ売れ、特にペヨトル工房の今野裕一氏の目にとまって「じゃあおまえら訳せ」と言わ

れ、そこから翻訳の世界でまあまあ注目されるようになった。

そのバロウズが創作に使ったカットアップやフォールドインという手法は、雑誌や新聞をハサミでちょん切り、あるいは適当に折って、それを適当に並べ、良さげな文章にするというものだ。つまり、まともな文章ではないのだから、それを普通の文章と同じように訳してはいいいわけがない。これぞまさに、辞書を引いて単語をそのまま並べるべき翻訳だったりする。普通の意味での文脈がないことこそ、そこでの文脈で、したがってまともな文章にせず、本当に単語の羅列にしなくてはならないわけだ。

ところが、既存の翻訳の多くはそれを必死で普通の文章にしようとしていた。サンリオ SF文庫の『ノヴァ急報』『爆発した切符』もそうだったし、1960-70年代アメリカ文学の見事な分析をしたトニー・タナー『言語の都市』でバロウズを採りあげた部分もそうだった。たとえば「赤いにんじん、机、それが川の上流ぼくは何を緑のちようちん」というようなバロウズの文章を訳そうとして、必死でなんとか言葉を補って「赤い川辺にある机の上に置いてあったにんじんは、上流から流れてきた時に僕が見つけて、何を思ったか緑色のちようちんと並んでいる」とでっちあげるわけだ。それはまずいでしよう。

わかるものをわかるためには、わからないところはちゃんとわからないようにしなきゃ

いけない。ちなみに、AI以前の郵便番号自動読み取りなんかでの大きな課題は、ただの汚れや意味不明な線を、「意味不明だ」とはじくことだった、とかつて大手町にあった通信総合博物館の展示には書いてあったように記憶している。機械はバカだからなのか、なまじ賢いからなのか、無理にでも何かの数字にこじつけてしまうのだそう。人間の人間たるゆえんは、わからないことをわからないと言えることなんだ、とそれを見て感心したものだけれど、これは今もそうだと思う。きつと、世の中にいろいろな誤解が生まれる理由は、わかつてはいけないものをわかつたつもりになってしまふからだと思う。

この間ぼくが訳したアーサー・ラヴジョイの『存在の大きいなる連鎖』という思想史の本も、松岡正剛なんかが名著だと絶賛していたけど、彼がすばらしいと言っているところを実際に読んでみると、著者が中世の人によるヘンテコな議論の例として挙げている部分だった。それを松岡は、著者ラヴジョイが自分の見解として述べた深遠なご託宣たくせんだと思っ  
てありがたがっていた。

みんな、本をちゃんと読まないんだ。自分の見たいもの、特に何か自分の聞きかじった単語をあれこれ見つけて、それを一生懸命頭の中でつないだあげくに、「ここに俺が見たい

ものがあつたぞ」と喜んでゐる。その議論が全体の中でどういう位置づけなのかも確認しないから、ただの反例を著者の言いたいことだと勘ちがいでしてしまう。そしてそれは、松岡だけのせいではない。翻訳自体が、そこで主張されていることが読めておらず、なんとなく単語を並べて訳文をでっちあげている。

それは読者がかわいそうだろう、とぼくは思う。『存在の大きいなる連鎖』のような、なんとなく難解で重厚だと思われている本を読んで、「何もわからない」と悩んでいる人を見ると、「いやいやそうじゃない、君たちが思っているよりずっと単純なことを言っているんだよ」と突っ込みたくなる。だってせっかく知的好奇心にかられて、ちょっとむずかしそうな本に手を出したんじゃないか。そこで言われていることの概略くらいはわかつてほしいじゃないか。

ぼくは推理小説を最後の種明かしから読む、ろくでもない人間ではある。が、推理小説でそれをやるかはさておき、全般に決して悪い本の読み方ではないと思う。まず冒頭を読んで「こんな話ね」とあらましをつかんで、真ん中はいったん飛ばしてすぐに結論を開き、「こういう結論に持っていくのね」と確認する。ガウスだかラプラスだかは、数学の論文を読むとき、まさにそうしていたらしい。ただし彼らは天才なので、間の証明は自分のほう



がうまいから読むだけ無駄、ということだったらしい。凡人はそこまではできないけれど、スタートとゴールがわかれば、その途中をつなぐ細かい理屈についても見通しがよくなるし、本だつてずつと理解しやすくなる場合が多い。

まず『存在の大きいなる連鎖』の冒頭を読むと、ラヴジョイはもう少しわかりやすいことを言おうとしている。西洋の一部の哲学や神学は、なんだかずいぶんと珍妙な話にこだわっているけれど、それはなぜ、そしてそれがどういう影響を与えてきたの？ それがメインの話だ。ちなみに、その珍妙な話というのは、世の中のあらゆる存在は、神様から天使から人間、もぐら、ミミズ、にんじん、アメーバ、岩等々というあらゆる存在まで、びっちり連続していますよ、という話。ここでのポイントは、これが珍妙でばからしい、現実的にはどうでもいい説なんだ、ということだ。

そして最後の結論も、その繰り返しで、二千年にわたる<sup>うよきよくせつ</sup>紆余曲折を経てそれが<sup>はたん</sup>破綻しましたよ、ようやくこれがくだらない話だということがみんなに理解され、おかげで理解された瞬間に忘れられましたという話をしている。そしてその途中でも、ラヴジョイはいろんな人の著作を結構バカにして、面白がってネタにしている。この本すべては、各時代のエライ哲学者たちが、この思想にとらわれたために、いかにバカげた話を必死で考えてい

るか、という嘲笑ちやうしやうのかたまりだ。哲学者のカントは素人ながらに物理学を一生懸命勉強した結果、地球人よりすぐれているはずの木星人や土星人はこんな体の作りをしているにちがいない、と論じたそうなる。ラヴジョイは、このキテレツな話にツッコミ入れるのは野暮だよ、とコメントしているけれど、当然ながらこれは「ここ、笑うとこだぞ」という符丁ちようだ。言わば、西洋思想版『トンデモ本の世界』だ。

だったら、翻訳でも著者ラヴジョイが、それを決してそれ自体が重要なものとして紹介しているんじゃないよ、というのがわかるようにすべきだろう。木星人を真面目に論じているカントを紹介している部分は、明らかに著者は笑っている。真面目に理解すべき深遠な思想だと思っではない。だったらそういうニュアンスは出したい。

でもたぶん、営業的には、「本書は西洋思想を貫くすごい観念を鋭く見つけ出して真剣に分析してます！」と言ったほうが売れるだろう。「これは西洋思想版『トンデモ本の世界』なんです」と本当のことを言ったら、興味を持つ人がどこまでいるかどうか。訳す人も研究する人も、そこで言われていることがすぐくむずかしい深遠なことだ、と言いたいだろう。そのほうが自分に箔はくがつくから。だから、著者の意図を反映しない、ときにまちがっているでもこむずかしげな、わかりにくい訳のほうが幅をきかせる。それを読まされる読者

は、たまつたもんじゃやない。

そう思うんだが……読者のほうも実は、意味不明なほうがあるがたいと思ってるんじゃないか、と思うこともある。この本に書かれていることでもあるんだが、思想や哲学の本を読む人々は、実はわからなくていい。むしろわからないほうがいい。何を言ってるのかわかんないものを読んで、ほんわかしめた気分になりたい。松岡正剛のように、わかつてもないいくせに（またはだからこそ）わかったようなツラをして、聞きかじりで意味不明のことをつぶやいて深遠ぶりたいだけだったりする。そういう人は、なまじわかると、それが何か浅はかなことだと感じ、まして「あなた、実は何もわかってないでしょ」と言われると、怒ったりする。そういう人は山形が訳し直した正しい翻訳を読んで、「そういうことか、よくわかった」とありがたがるどころか、「浅はか」「低俗」「訳者の見方を押しつけている」とグチを垂れる。が、それは仕方ない。自分にとって何がよいことかわからない人はたくさんいる。そこまでは面倒見切れない。

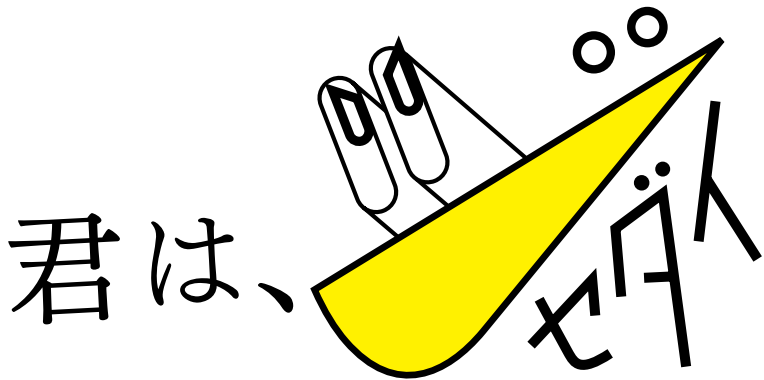
が、それはさておき、ぼくは翻訳でもまず最初と最後をやり、次に間のおもしろいところを見つけてチマチマやっていくことが多い。すると、いつの間にか半分くらい訳が終わってしてしまうので、ここまで訳したなら残りも暇があればやっつてしまおうという気分になっ

て、一冊の翻訳ができあがる。そういえば、ケインズの『雇用、利子、お金の一般理論』も、最初と最後の有名なフレーズをたくさん訳し、その間をつないでいったら結構なボリュームになってきたので、「残った地味なところも力づくでやるか」と仕上げて一冊の翻訳にしてしまったっけ。

他の本でもそうだ。なんだかここんとこおかしいな、と思うところがあると、原文を見て「そこはこうだろ」と自分なりの改訳を作ってみる。あちこちそういうところが出てくると、章単位、節単位で改訳ができる。その間を埋めるうちに、世の中の変な翻訳やおかしな解釈に対して「いや、そうじゃないでしょ、こうだよ」と言おうとして一冊が翻訳できてしまう。ぼくが手がける翻訳というのはそういうものも多い。

### 翻訳の技術

翻訳をするとき、よっぽど古いとかすさまじく専門用語を使っているとかでもない限り、ぼくはほとんどの本の言っていることはすぐわかる。ぼくが訳す本は、超専門書はあまりない。だいたいが一般向けの本だ。一般向けの本は、一般人が普通に読めばある程度はわからなきやいけないのだ。だからその翻訳だって素人にわからなきやいけない。



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**